

資料

愛媛県立宇和高等学校旧蔵の植物さく葉標本—明治・大正時代の島津製作所製教育用標本—

小林 真吾*

Herbarium Specimens Formerly Owned by Ehime Prefectural Uwa High School :
Educational Specimens Manufactured by Shimadzu Factory in the Meiji and Taisho Eras

KOBAYASHI Shingo

Abstract : In 2020, the herbarium specimens produced and sold by Shimadzu Factory were donated by Ehime Prefectural Uwa High School to the Ehime Prefectural Science Museum. There were 510 specimens in all, made between the Meiji and Taisho eras. Analysis of the specimens revealed several patterns in the format of the labels. In addition, many of the specimens from the Meiji era tended to be collected in eastern Japan. In the Taisho era, SAKURAI Hanzaburo, technical staff of Imperial Museum, was involved in the collection of specimens, and MAKINO Tomitaro, a botanist, was involved in the determination. The specimen department of Shimadzu Factory was founded in Kyoto, but it is considered that the production base was in Tokyo. Until now, educational specimens have rarely been considered as research subjects for regional natural history, but their value as materials for modern Japanese botanical history and scientific history should be examined.

キーワード : 島津製作所, 教育用標本, 植物さく葉標本, 明治時代, 大正時代, 愛媛県立宇和高等学校

Key words : Shimadzu Factory, educational specimens, herbarium specimens, Meiji era, Taisho era, Ehime prefectural Uwa high school

はじめに

愛媛県立宇和高等学校は、明治41(1908)年に設置された東宇和郡立農蚕学校を起源に持つ、県内では歴史の古い農学系の課程を持つ高等学校である。愛媛県総合科学博物館では、令和元年度に同校から約4千点の自然史資料の寄贈を受け、整理を進めている。寄贈された資料の約80%が植物標本で、その中には明治から大正時代にかけて島津製作所によって製作・販売された標本が確認された。

島津製作所は明治初期の創業以来、様々な医療機器や実験器具・教材を製造・販売し現在に至っており、明治20年代から第2次大戦の頃まで自然史標本を販売していたことが知られている。近年、学校で保管されていた自然史資料が注目を浴び、博物館の企画展のテーマとして取り上げられる事例も増えつつあり、標本群についての論考も見られるようになった。説田(2018)は標本のラベルに着目し歴史的な価値を指摘し、販売用の目録からは産業資料としての可能性について論じている(説田,

2019)。また斎木(2019)は明治以降の教育制度の変遷という観点から標本整備の背景を論じた。愛媛県内の事例としては、稲葉らによる動物系標本に関する一連の報告があるが、過去の総合調査等の証拠標本や、種の分布記録等に関する新知見の多いものが多い(稲葉, 2017a, 2017b, 2017c, 2017d, 2018, 2019, 2020; 稲葉・岡山, 2018a, 2018b, 2018c)。島津製作所の標本については、藤井ほか(2019)が標本製作当時の製作体制などについて言及している。

宇和高校旧蔵の島津製作所製の標本については、これまで一部資料群の概要を報告している(小林, 2018)が、本稿では改めて標本群の傾向を把握するとともに、標本の製作と同時期に発行された島津製作所の目録と対比し、標本製作当時の製作体制について考察する。

宇和高校の標本について

宇和高校の植物標本は全部で3,230点にのぼり、大きく以下の三つのグループに分けることができる。第一の

* 愛媛県総合科学博物館 学芸課 自然研究グループ
Curatorial Division, Ehime Prefectural Science Museum

グループは、開校とともに赴任し、第3代の校長を務めた末光績ゆかりの標本群である(以下、末光標本と呼ぶ)。この末光標本は、末光績自身の採集によるもののほか、末光の友人らが関わったものなど447点に上る。末光標本は、札幌農学校在学中の末光や友人らが愛媛県以外の地域で採集したものを多く含んでいる。郡立農蚕学校では、そのようなものも教材として活用していた様子がうかがえる。末光績は、札幌農学校の先輩であった有島武郎と親交が深かった。末光は有島の最期を軽井沢で見届けたことでも知られるが、その際に同行していたのが、同じ札幌農学校出身で有島の作品出版を支えた叢文閣の足助素一である。末光標本には、足助が山梨県の林業事務所に勤務していた時期のものと思われる標本が40点ほど含まれている。末光標本は、こうした札幌農学校時代からの友人らに関する資料と合わせて読み解くことで、当時の学生生活や交友関係に関する資料となる可能性がある。末光標本は他の二つのグループに比べ点数は少ないが、一般的な学校標本や植物学的な標本の範疇に収まらない歴史的な資料としての側面を持っている。

第二のグループは郡立農蚕学校から宇和高校に至る間に製作された学校活動下の標本群である(以下、学校標本と呼ぶ)。この標本群は宇和高旧蔵植物標本の中心をなすグループで、約2千点にのぼる。学校標本は教員によって製作されたものが多いが、生徒の手によるものも相当数ある。中でも特に目を引くものは、末光績を支えた農業科目教員の土居清五郎(宇和郷土文化保存会人物伝編纂員会、1993)の標本で、この標本群の10%ほどを占めている。また、鹿児島県南部の鹿屋農学校(現・鹿児島県立鹿屋農業高等学校)にゆかりのある標本も10%強程度見られる。学校標本の最大の特徴は、開校時の郡立農蚕学校からの学校の変遷がラベルで追える点である。郡立農蚕学校から県立に移管されたのちの農業学校のものだけでなく、東宇和高等女学校や東宇和高等学校のものも確認された。当時は農業系に限らず、様々な学校で植物標本が作られていたことがうかがえる。これらの末光標本、学校標本については、改めて報告の機会を持つこととしたい。

第三のグループは、本稿で報告する島津製作所などの教材会社で製作・販売されていた標本である(以下、教育用標本と呼ぶ)。このグループは島津製作所製のものが510点、京都科学株式会社製のものが200点含まれていた。京都科学株式会社の標本は、いずれも昭和30年代に採集・標本化されたものであった。木製の箱に収納された一式100点のセットが2箱あり、100点の中に様々な分類群がまとめられている構成であった。一方、島津製作所製の標本は、いずれも明治30年代から大正時代に採集・標本化されたものであった。標本の構成は分類別と用途別のものがあり、分類別では禾本科(イネ科)

が115点(表1)、莎草科(カヤツリグサ科)が80点(表2)、隠花(シダ、コケ、藻類、菌類、地衣類)が88点(表3)。用途別では薬用(東洋・西洋)が27点(表4)、有用(食用、繊維、油脂など)が96点(表4)であった。これらの標本はそれぞれ別の木製の箱に収納されており、セットで販売されていたものと推測される(図1)。その他に、学校標本などと混在していたものが104点あった(表5)。

明治から大正期の植物の教育用標本に関する情報を検索してみても、研究対象として取り上げた事例はほとんど見出されず、これほどまとまった数で見出される事例は少ないと考えられる。教育用標本は一般的に採集地や採集日、採集者などの情報が不詳であることが多い。しかし、当時の標本では、個人が採集したもので地名表記は大雑把なことが多く、採集日など他の情報の揃い方によっては十分な資料価値を有すると考えられる。また、入手の経緯などの状況が解明できれば、当時の植物学の普及や農業教育に関する検証を行う際の重要な資料となる可能性がある。以下では、教育用標本のうち島津製作所製のもの(以下、島津標本と呼ぶ)について、標本とラベルの体裁、採集地の情報について概観し、目録との対比を通じて当時の製作体制について考察する。

標本の体裁とラベルについて

島津標本は、概ね縦36～38.5cm、横30～31cmの厚紙を台紙としている。横幅のサイズはばらつきが少なく、縦のサイズはおおよそ2cmの間でばらつきがある。硫酸紙のカバーが掛けられているものが大半だが、経年劣化で滅失したものも多い。保存状態は比較的良好で、昆虫などの食害を受けたものは少ない。ラベルは定石通り概ね台紙の右下に配置されている(図2)。

島津標本のラベルには、整理の過程で複数の書式があることが確認された。一般的に、植物標本のラベルは同一人物、同一の組織のものでも書式が変更されることがあり、時代的な変遷が読み取れる可能性がある。そこでラベルのバリエーションを比較した結果、島津製作所の社名が入るものと入らないものとに分けられ、さらに社名が入るものは地名表記などラベルの記載事項やデザイン、いくつかのパターンがあることがわかった。

ラベルは、種名や学名が印刷されたものと、空欄に手書きで記入されるものがあるが、書式は基本的に上からNo、科名(和・ラテン)、和名、学名、採集地・採集年月日、社名の順に記されている。一方、社名が入らないものは書式も異なり、一見すると島津製作所のものとは判別することができない(図3)。これらの標本は、禾本科で74点、莎草科で61点、薬用で1点含まれていた。

文字の書かれる方向は、明治時代のラベルでは現代と異なり右から、大正時代のラベルでは現代と同じ左から

書かれている（図4）。明治時代のラベルを大正時代に流用する例など、ごくわずかな例外はあるが、この文字の記載方向は当館に寄贈された島津標本のほぼ全体に共通する特徴である。

社名入りラベルの表記には複数のパターンが存在した。いずれも島津製作所標本部と書かれていることから、ラベルが印刷されたのは明治28（1895）年の標本部設置以降とわかる。この前後に加わる情報で、製作年代（厳密に言えばラベルの印刷年代）がわかるものがある。島津製作所標本部の前に「株式会社」が入るものがあるが、これらは、大正6（1917）年の株式会社化以降に印刷されたものであり、今回の標本群の中では比較的新しい部類のものと言える。さらに会社の所在地表記でも、製作年代が類推できる。島津製作所は京都で創業し現在に至ることは周知の事実であるが、この所在地表記に京都だけが記されたものと、京都以外の地名として東京と福岡が記載されているものが見出された（図5）。このラベルには株式会社の記述も見られることから、大正6年の会社化後のものである。島津製作所が京都以外に開設した営業拠点としては明治33（1900）年に大阪出張所、同39（1906）年に東京出張所、同42（1909）年に九州販売店があった（島津製作所、1967）。大阪の仮出張所は明治37（1904）年に閉鎖され、大正4（1915）年に改めて出張所が開設されている。大正6年に株式会社化された時点の体制は本社の他に東京・九州・大阪に支店が設置されている。この標本は大正9（1920）年に採集されているが、営業拠点の状況を考慮すると辻褄が合わない。大阪がラベルに記載されない、何らかの事情があったものと考えられる。また、明治時代の標本では、枠線や飾りなどに複数のパターンが見られる一方で（図6）、大正時代にはこのような罫線や飾りが記された標本はほとんど見られない。このような装飾を施すことによどのような意図があったのかは定かではないが、明治から大正にかけて、島津製作所としてのラベルの記述スタイルは、よりシンプルなものに収斂していったものと考えられる。

標本採集地と年代

島津標本については、当館に寄贈される以前にも一部の標本群について調査を実施したことは冒頭にも記した。対象としたのは隠花植物標本集に含まれている海藻標本30点で、その結果は2018年の藻類学会で発表した（小林、2018）。その際、島津製作所が京都の会社であるにもかかわらず、標本の採集地が東日本¹⁾に偏っていることを指摘した。そこで今回寄贈された標本についても改めて採集地について検討した。対象としたのは、採集地記載が少ない薬用と有用を除いた分類学的標本（禾

本、莎草、隠花）と混在標本である。

その結果、禾本115点から産地不詳のものを除いた104点のうち98点（約94%）、莎草80点から産地不詳のものを除いた77点のうち71点（約92%）、隠花88点のうち74点（約88%）が東日本で採集されたものであった。一方で混在標本104点から産地不詳のものを除いた98点のうち81点（約82%）が西日本のものであった。禾本と莎草では全体の半数程度の産地が東京で、混在では半数程度の産地が京都（山城）周辺のものであった。隠花では、東京と相模を合わせたものが半数程度を占めていた。

また、それぞれの採集年代を見ると、禾本は産地不詳も合わせた115点のうち113点が明治時代で2点が大正時代、莎草は採集年不詳の1点を除く全てが明治時代、隠花は88点のうち87点が明治時代で1点が大正時代であった。一方、混在標本は、産地不詳のものも含む104点のうち、大正時代に採集されたものが88点、明治時代が16点であった。

今回、当館に寄贈された標本の傾向からは、明治時代の標本は東日本で採集されたものが多く、大正時代に採集されたものは西日本のものが多いと言える。この結果から、明治時代と大正時代で標本採集・製作の体制が異なっていたのではないかと、という仮説が考えられる。この傾向が当時販売されていた島津標本全てに共通する特徴かどうかは、同一時代の全標本の比較や、同一種別標本群の時代間比較；例えば明治時代と大正時代の禾本標本の比較、などの検討が必要である。

目録との対比

明治30年代になると、島津製作所の各種理化学機器製品の需要が高まり、明治36（1903）年に京都市内の河原町に工場を新築し、明治39（1906）年には標本部の工場も新築している（島津製作所、1967）。さらに明治39年6月には総合カタログが発行され、標本部では生物・人体・地学関係の各種標本を総合的に製造販売している（島津製作所、1967）。標本の調査を進める過程で、これらの記述とほぼ同時期にあたる明治39年3月に発行された『植物学用標本器具材料目録』を入手した（図7）。現代では理科教材販売各社は毎年のようにカタログを発行しているが、社史には当時のカタログの発行頻度などの詳細な情報は記述されていない。説田（2019）は、明治から昭和にかけて行われていた標本販売産業について目録の発行年代を整理している。この中で島津製作所発行の最古の目録は明治44（1911）年の『動物学用標本器具材料目録』で、植物の目録は昭和4（1929）年の『植物学用標本目録』が挙げられている。今回入手した目録はこれらよりも前に発行されたもので、島津製作所の目

録としては最も古い部類のものと考えられる。宇和高校旧蔵の島津製作所の標本はいずれも明治30年代から大正14年までの約30年間に製作されており、このカタログと同時期に販売されていたものと考えられる。

目録は208ページで、前半は腊葉標本、後半には模型や実験器具が掲載されている。標本は隠花植物から藻類、菌類、蘚苔類、シダ植物、裸子植物、被子植物の順に、合計2,364種が掲載されている。分類体系は隠花植物と顕花植物が分かれていることからアイヒラー以降の体系が採用されているようであるが、当時、日本語で出版されていた文献がベースになっていると考えられる。目録は種に対して通し番号が振られており、さらに個別の標本とは別に45種類の組み標本が掲載されている(図8, 9)。木箱入りの標本は、これらのものと考えるのが妥当であろう。

寄贈された組み標本は禾本、莎草、隠花、有用、薬用の5種類であったが、目録と対比すると禾本、隠花、薬用の3種は概ね目録と点数が合致する。一方、莎草と有用は、目録と合致しない。莎草は目録では65種だが、寄贈されたものは80種が入っており、目録よりも数が多い。目録には個別の標本として莎草は102種が掲載されていることから、何らかの意図を持って、既存の組み標本に追加したセットを逃した可能性が考えられる。

一方、目録の組み標本の中に有用植物の記載がない。有用植物のラベルを見ると、採集年月日は「明治三十」が印字済みで、年の一桁を追記できるようになっている。明治30年代の間は使用する前提で印刷されたラベルであると考えられるが、他の標本では明治までが印字され10の位から記入する方式となっている。このようなラベルの記入方式は、おそらく明治30年代の早い時期のもので、島津標本の中でも古い部類のものと考えられる。分類別、用途別といった組み標本は、農業学校などのニーズに合わせて早い段階から作られており、今回寄贈された有用標本は明治39年の目録の時点では、繊維や油蠟など細分化されていたと考えられる。

なお、標本に記載されている学名と目録の学名には、一致しないものが存在した。これは、標本と目録のそれぞれが別の出典に基づいているとみて間違いない現象である。目録にしたがって標本を販売しているものの、目録の発行頻度と植物の学名の変化を対応させるのが難しい状況が、すでに当時からあったのかもしれない。当時、植物名を調べる上で典拠となりうる書籍としては、松村任三の『日本植物名彙』や『帝国植物名鑑』のほか、牧野富太郎の『日本植物志図編』などがあったと思われるが、標本の方は『植物学雑誌』などの逐次刊行物の情報を典拠としていた可能性がある。標本の学名は手書きの筆記体で判読が困難なものも多くあり、出典の解明については今後の課題としたい。

標本の正確性・希少性と標本製作体制

目録では、科ごとに配列され和名、学名が記されているが、驚くべきことに、それぞれの種の希少性がAからDのアルファベットで評価されている。この希少性評価は陸上の植物だけでなく海藻などにも記されている。目録中に「島津製作所標本部発売植物腊葉二就テ」と題した説明文があり、ここでアルファベットについて以下のとおり記述されている。「前記品種中A'及A等の符号を付するものは極希産品にして代価も従って高直に御座候以下英字の順を以て稀産又は採集困難の順序を表わし置き候間左様御承知被下度候²⁾」。この文にはA'という最高ランクが記されているが、目録の掲載種には存在せず、AからDの4段階となっている。当時、こうした植物の希少性に関する情報がどこまで布衍されていたかを知ることは困難であるが、少なくとも、日本国内の分布状況を知る立場の人物の協力がなく、書きえない情報であることは間違いない。

こうした「国内分布に詳しい人物」の関わりをうかがわせる事例は、標本にも見られる。隠花植物中の海藻標本の中に、明治36(1903)年に採集されたユナ *Chondria crassicaulis* の標本が含まれている(図10)。ユナは日本各地に分布するフジマツモ科の紅藻で、和名は山口県萩地方で呼ばれていた地方名に由来するとされる(北山, 2017)。島津標本中のユナの標本には和名が付さず、学名のみが記載されている(図11)。また、他の海藻は種名と学名が印刷されているが、ユナは学名が手書きとなっている。ユナに和名をつけたのは日本の海藻学の開祖と呼ばれる岡村金太郎で、この標本の採集から4年後の明治40(1907)年のことである。510点の中に和名が無い種の標本は他に存在せず、レアなケースであると言える。和名が無い種でも、標本集に入れる意義があるとわかっている人物が、標本集の監修に関わっていたと考えられる。

大正時代の島津標本については、株式会社上野科学社の創業者、上野重三の記述から、正確性の保証や希少性の判断に結びつく情報が得られた。標本製造・販売企業の株式会社上野科学社は、昭和5(1930)年に創業された。創業者の上野重三は、明治39(1906)年に三省堂標本部に入社したが、大正2(1913)年の標本部閉鎖に伴い島津製作所に移籍する(日本科学標本協会, 1982)。上野重三が三省堂から島津製作所を経て自社の創業に至る標本業の回顧録の中で、島津製作所時代の「上野」と「牧野富太郎」とのやり取りが記されている。島津製作所の株式会社化後、高等学校の増設の中で標本の需要が高まっていたが、学校に整備する標本には権威が必要とのことで、牧野富太郎の検定を求める声が上がっていた。牧野と懇意にしていた上野であったが、大量の標本の同定は依頼

が難しく、策を弄した様子が読み取れる。この回顧録の中で、標本の製作者は帝室博物館で植物を担当していた桜井半三郎であったことが記されており、標本の出来が素晴らしく牧野による修正も少なかったと記されている（上野重三、1956）。鳥津の植物標本に牧野が関わっていた記述は、明治・大正時代の標本業界を振り返る座談会の中でも語られており、大正6（1917）年から鳥津の標本部に勤務していた山本宗三が、「鳥津としては余りやっぴらず、主に東京から取り寄せていた。牧野の検定付きでないといかんとか言うて」「鳥津では岩井が採集には出掛けていたが、商品にしている様子はなかった」と発言している（日本科学標本協会、1982）。この座談会では、ある東京の企業から「植物標本の製作を高校教員に依頼していた」、「例外はあるがほとんどがそうだった」、などの発言も見られる（日本科学標本協会、1982）。鳥津製作所の「権威付け」の背景は、このような当時の事情にあると考えられる。

牧野富太郎については標本の採集データや書簡などから詳細な行動録が編纂されている（山本・田中、2004）。この行動録で鳥津標本採集年代の頃の牧野富太郎の行動を確認したところ、鳥津標本のために採集を行った直接的な記録は見出されなかったが、標本販売に関わっていた記録が確認できた。大正5（1916）年頃には丸見屋化学研究所（のちのミツワ石鹼）との間で3回が確認された。この時は販売先と点数、金額の記録はあるものの、買い手の記述は見られない。大正10（1921）年には、大阪植物同好会の竹下英一が勤務していた樟陰女学校に牧野の標本200点が譲渡された記録が見られ、この標本の売買過程に鳥津製作所が介在していたことが読み取れる。この前後、鳥津製作所に出向き「用を弁ず」との記述が散見される。この頃は池永孟の援助を受けて研究所の設立に奔走していた時期でもあり、関西方面での活動に伴い鳥津製作所との関わりが深まっていたものと考えられる（渋谷、1987；田中、2023）。

川勝(2019)は、鳥津製作所が教育用理化学機器を製作・販売する過程で、京都帝大や京都高等工芸学校の教授らを顧問として招聘していたことを指摘している。この顧問制度については、明治44（1911）年から行われていたことが鳥津製作所史で確認できる。川勝（2019）で記述されているのは理化学機器に関連する電気工学や製造化学などの有識者であるが、自然史分野でも同時期に顧問が囑託されていた。植物分野の顧問にはイチヨウの精子発見で知られる平瀬作五郎、動物では京都高等工芸学校教授の会田龍雄の名が挙げられている（鳥津製作所、1967）。京都帝大に生物学科が設置され植物学が充実していった大正10（1921）年頃には、東京帝大を卒業した小泉源一が赴任していた（植物分類学会、1943；久内、1954）が、当時の世相としては牧野の権威が強かったも

のと考えられる。

こうした標本の収集・製作体制についての情報は非常に少なく断片的である。藤井ほか（2019）は、鳥津製作所による明治期の鳥類標本についての論考の中で、西日本などの単位で地域収集員がいたことを記している。鳥津製作所標本部が組織的かつ分野ごとに収集を行っていたことは確かと思われるが、植物に関してはほとんど情報が無い。教育用としての標本の体裁をどのように決めて行ったかの経緯や、正確性をどのように保証していたかについての情報は著しく少なく、そのことが教育用標本の価値を貶めている要因の一つとも言える。大正時代の標本に関しては桜井半三郎や牧野富太郎の関わりが一部明らかになったものの、明治期については全くわかっていない。当時の研究者の行動、あるいは企業側の記録などがさらに調査され、採集者の存在、研究者と標本群との関わりが紐解かれることに期待したい。

終わりに 教育用標本の資料価値と可能性

長らく研究対象として扱われてこなかった教育用標本は、いわば様々な分野の「はざま」にあった資料群である。扱う情報の分野は横断的で、情報の蓄積も進んでおらず、今後、新たな資料が得られる可能性も年とともに薄れていく。しかしながら、黒住（2021）が指摘しているように、教育用標本は学芸員の資質と技量で情報を補い選別しながら残されるべきである。次世代以降に資料を残すという博物館活動の基本と、過去の標本を採集することはできない、というシンプルな原理に立ち返る必要がある。

教育用標本の短所は、標本の情報として重要な採集者や同定者が不明であることや、採集地が全国各地に分散しているため地域との関わりが薄いことにある。実際に、今回寄贈された鳥津製作所の標本群は、全てが愛媛県以外の地域で採集され、採集者の情報は未記載であった。また採集年月日が不詳のものも存在した。こうした教育用標本の短所は従来の資料収集、研究対象から外れる要因となってきたが、逆に言えば、この一般的な「標本のあるべき姿」のような固定観念が教育用標本の価値創造の機会を逃し続け、資料研究の阻害要因となってきたとも言えるのではないだろうか。

黒沢（2020）は、古い教材用標本の価値を認める根拠の一つに戦後の急激な環境変化で喪失した生物多様性の情報を挙げており、そのような例は当館の鳥津標本の中にも見られた。禾本の標本群の中から、明治43（1910）年に武蔵国吉祥寺で採集されたヒナザサ *Coelachne japonica* の標本が見出された（図12）。ヒナザサは全国的に減少傾向にある植物で、東京都のレッドリストではすでに絶滅したのものとして掲載されている。こうした事

例は、教育用標本という性格を超えた利活用の可能性を示している。愛媛県で見つかった教育用標本であるが、目録の希少性情報などと組み合わせれば、東京都、あるいは関東地方の明治時代のフロラを復元する上で貴重な情報源となりうる。

今回は比較的まとまった数の島津標本が揃ったことと、島津製作所の関連資料を入手できたことで、新たな視点で資料を見直すことができたが、このような分析も教育用標本に関する研究の端緒に過ぎない。明治39年の目録の掲載種数が2千種以上、45種類の組み標本があったことを考えると、本稿で報告した標本数はごくわずかである。しかし、標本とその周辺情報を整理・蓄積し新たな価値を創造していくことができれば、地域における自然史、科学史の中の植物学といった従来の枠組みを捉え直すことができると考えられる。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、明治・大正時代の標本業界に関する情報をご教示いただくとともに貴重な文献をご提供いただきました愛媛県総合教育センターの稲葉正和氏に、心より感謝を申し上げます。

注 釈

- 1) ここでは広域関東圏の西端を境界とし、新潟県、長野県、静岡県までを東日本とした。
- 2) 目録では旧字体および旧仮名づかいが用いられている。

文 献

- 藤井忠志・稲葉正和・湯浅俊行・横山恵一, 2019: 岩手県陸中産ライチョウ剥製標本の発見と早池峰山におけるライチョウ生息の可能性. 野生生物と社会, 7 (1), p.33-40.
- 久内清孝, 1954: 小泉源一博士の訃に接して. 植物研究雑誌, 29 (1), p.29-30.
- 本間健彦, 2004: 「イチョウ精子発見」の検証－平瀬作五郎の生涯. 新泉社.
- 稲葉正和, 2017a: 最近発見された愛媛県重信川水系産のスナヤツメ (ヤツメウナギ科) の標本. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 22, p.1-8.
- 稲葉正和, 2017b: 最近発見された西条市産のシラウオ (シラウオ科) の標本. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 22, p.9-14.
- 稲葉正和, 2017c: 愛媛県立今治南高等学校で確認された昭和初期に作製された愛媛県産の鳥類標本について.

- て. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 22, p.23-28.
- 稲葉正和, 2017d: 新居郡加茂村大保子谷 (現西条市藤之石) で捕獲されたニホンカモシカ *Capricornis crispus*. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 22, p.35-40.
- 稲葉正和, 2018: 過去の四国および愛媛県におけるホンドリツネ *Vulpes vulpes japonica* の生息記録. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 23, p.57-70.
- 稲葉正和・岡山健仁, 2018a: 石鎚山系総合学術調査で採集されたコガタブチサンショウウオ *Hynobius stejnegeri* とシコクハコネサンショウウオ *Onychodactylus kinneburi* の標本. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 23, p.35-42.
- 稲葉正和・岡山健仁, 2018b: 大正時代に赤石山で採集されたシコクハコネサンショウウオ *Onychodactylus kinneburi* の標本. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 23, p.43-48.
- 稲葉正和・岡山健仁, 2018c: 面河溪谷産のシコクハコネサンショウウオ *Onychodactylus kinneburi* の標本の調査記録. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 23, p.49-54.
- 稲葉正和, 2019: 愛媛県内の公立学校に収蔵されていたニホンカワウソ *Lutra nippon* およびカワウソ属の1種 *Lutra sp.* の標本. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 24, p.11-22.
- 稲葉正和, 2020: 愛媛大学附属高等学校に収蔵されていたトキ *Nipponia nippon* の標本. 愛媛県総合科学博物館研究報告, 25, p.51-56.
- 川勝美早子, 2019: 明治期後半における教育用理化学器械製造の拡充と研究用・産業用機器製造への展開－島津製作所の製品目録と市場の変化について－. 技術と文明, 22 (1), p.27-40.
- 北山大樹, 2017: 海藻標本採集者列伝 (26) 長澤利英. 海洋と生物, 39 (2), p.144-145.
- 小林真吾, 2018: 愛媛県内の高校に保管されている明治時代の海藻標本. 藻類, 66 (1), p.88.
- 黒沢高秀, 2020: 福島県内の旧制中等学校の博物館に用いられた植物標本の整理および分析. 福島大学研究年報, 16, p.86-87.
- 黒住耐二, 2021: 学校標本をどのように取り扱うべきなのか?－千葉県睦沢中学校の貝類標本を例として－. 千葉中央博研究報告, 15 (2), p.129-137.
- 日本科学標本協会, 1982: 日本科学標本協会 25年の歩み. 日本科学標本協会.
- 斎木健一, 2019: なぜ学校に古い生物標本があるのか?. 博物館研究, 54 (12), p.10-13.
- 説田健一, 2018: 学校理科室の剥製は果たしてゴミなのか?－標本ラベルから探る剥製の歴史的な価値. 博物館研究, 53 (8), p.23-25.

- 説田健一, 2019: 学校標本を産業史の資料として活用するための視点－明治から昭和初期(戦前)までの標本販売業の変遷. 博物館研究, 54 (12), p.6-9.
- 渋谷章, 1987: 牧野富太郎－私は草木の精である. リポート.
- 島津製作所, 1967: 島津製作所史. 島津製作所.
- 島津製作所標本部, 1906: 植物学用標本器具材料目録. 島津製作所標本部.
- 植物分類学会, 1943: 京都帝国大学理学部植物学教室分類研究室史. 植物分類・地理, 13, p. 309-313.
- 田中伸幸, 2023: 牧野富太郎の植物学. NHK 出版.
- 上野重三, 1956: 標本業界五十年の回顧. 日本教材新報.
- 宇和郷土文化保存会人物伝編纂委員会, 1993: 宇和の人物伝. 宇和町教育委員会・宇和郷土文化保存会.
- 山本正江・田中伸幸, 2004: 牧野富太郎植物採集行動録・明治・大正篇. 高知県立牧野植物園.

表1 宇和高校旧蔵島津標本のリスト；イネ科

Table 1 List of Shimadzu specimens formerly owned by Uwa High School ; Specimens of Poaceae

種名	採集年 月 日	採集地	ラベル種別	書式	記入	備考
カモジグサ	M43 7 5	東京	撰集	右書き		
ヌカボ	M43 7 9	東京	撰集	右書き		学名に修正あり
ヌカススキ	M45 6 19		社名なし	右書き	手書き	
スズメノテツボウ	M44 5 13	東京	撰集	右書き		
セトガヤ	M44 5 18	東京	社名なし	右書き	手書き	
ウシクサ	M43 9 7	東京	社名なし	右書き	手書き	
コアブラススキ	M43 10 10	台湾	社名なし	右書き	手書き	
ヒメアブラススキ	M44 10 16	日向 高鍋	撰集	右書き		
ヲガルガヤ	M44 9 27	東京	撰集	右書き		
モロコシガヤ	M42 7 30	日向 美々津	社名なし	右書き	手書き	
ハルガヤ	M45 5 20	東京	撰集	右書き		
コブナグサ	T 1 9 18	東京	撰集	右書き		
カンザンチク	T 1 8 10	東京	社名なし	右書き	手書き	
メダケ	M44 5 30	東京	社名なし	右書き	手書き	
トダシバ	M44 8 8	東京	撰集	右書き		
ミノゴメ	M43 6 10	東京	社名なし	右書き	手書き	
ヤマカモジグサ	M42 9 2	陸中 岩手山	社名なし	右書き	手書き	
ヒメノガリヤス	M43 9 25	東京	撰集	右書き		
コバンサウ	M44 5 20		社名なし	右書き	手書き	
ヒメコバンサウ	M44 6 2	泉州 堺	社名なし	右書き	手書き	
スズメノチヤヒキ	M43 6 3	東京	撰集	右書き		
キツネガヤ	M43 7 7	東京	社名なし	右書き	手書き	
イヌムギ	M44 7 1		社名なし	右書き	手書き	
ホガヘリガヤ	M44 8 1	野州 日光	社名なし	右書き	手書き	
ノガリヤス	M43 9 20	東京	社名なし	右書き	手書き	
ヤマアハ	M43 8 1	常州 筑波山	撰集	右書き		
ヒナザサ	M43 10 9	武州 吉祥寺	社名なし	右書き	手書き	
ジュズタマ	M44 9 18	東京	社名なし	右書き	手書き	
ギヤウギシバ	M43 8 2	下総 行徳	社名なし	右書き	手書き	
カモガヤ	M44 6 10	東京	社名なし	右書き	手書き	
ハヒヌメリ	M44 10 2	東京	社名なし	右書き	手書き	
ヒロハノコメススキ	M43 8 10	野州 日光	社名なし	右書き	手書き	
コメススキ	M44 8 20	陸奥 恐山	社名なし	右書き	手書き	
タツノヒゲ	M43 8 10	東京	社名なし	右書き	手書き	
カリマタガヤ	M44 10 9	東京	社名なし	右書き	手書き	
テウセンガリヤス	M43 9 2	下総 松戸	社名なし	右書き	手書き	
シコクビエ	M42 8 20		撰集	右書き		
チカラグサ	M43 9 19	東京	社名なし	右書き	手書き	
カゼクサ	M43 9 21	東京	社名なし	右書き	手書き	
コゴメガゼクサ	M44 9 22	日向 美々津	撰集	右書き		
スズメガヤ	M43 8 20	東京	撰集	右書き		
ニハホコリ	M43 8 9	東京	社名なし	右書き	手書き	
ナルコビエ	M43 8 16	東京	社名なし	右書き	手書き	
イトカモジグサ	M43 6 10	武州 赤羽	社名なし	右書き	手書き	
ウシノケグサ	M44 7 20	野州 日光	社名なし	右書き	手書き	
オホトボシガラ	M43 8 17	甲州 駒ヶ岳	社名なし	右書き	手書き	
トボシガラ	M44 5 28	東京	撰集	右書き		
ムヅオレグサ	M43 5 20	東京	撰集	右書き		
ヒロハノドジャウツナギ	M43 8 8	信州 軽井沢	社名なし	右書き	手書き	
ドジョツナギ	M44 5 17	東京	撰集	右書き		
ミヤマカウバウ	M43 8 9	甲州 駒ヶ岳	社名なし	右書き	手書き	
カウバウ	M44 5 2	東京	社名なし	右書き	手書き	
タカネカウバウ	M40 8 5	信州 駒ヶ岳	社名なし	右書き	手書き	
オホムギ	M44 9 20		撰集	右書き		
ヤバネムギ	M43 5 22		撰集	右書き		
フシケチガヤ	M43 6 10	東京	社名なし	右書き	手書き	
チゴザサ	M43 7 20	東京	社名なし	右書き	手書き	
ケカモノハシ	M43 8 10	相州 七里ヶ浜	撰集	右書き		
オニシバ	M43 8 5	相州 七里ヶ浜	社名なし	右書き	手書き	
カモノハシ	M44 8 10	相州 鎌倉	社名なし	右書き	手書き	

ミノボロ	M43	6	13	東京	社名なし	右書き	手書き	
アシカキ	M43	7	27	下総 行徳	社名なし	右書き	手書き	
イブキヌカボ	M43	8	2	野州 日光	社名なし	右書き	手書き	
サヤヌカグサ	M43	10	2	東京	社名なし	右書き	手書き	
アゼガヤ	M44	9	7	房州 館山	社名なし	右書き	手書き	
ケチヤヒキムギ	M43	6	15		社名なし	右書き	手書き	
ササクサ	M43	8	17	濃州 中津川	社名なし	右書き	手書き	
カリヤスモドキ	M42	7	30	野州 日光	撰集	右書き		
ヲギ	M43	9	18	下総 野田	社名なし	右書き	手書き	
ススキ	M43	9	20	東京	撰集	右書き		
ススキ	M43	9	19	東京	撰集	右書き		タカノハススキに修正
カリヤス	M43	8	20	信州 駒ヶ岳	撰集	右書き		
タマガヤ	M43	8	13	野洲 那須	社名なし	右書き	手書き	
ネヅミガヤ	M43	9	17	東京	社名なし	右書き	手書き	
キダチネヅミガヤ	M43	9	7	武州 高尾山	社名なし	右書き	手書き	
チヂミザサ	M43	9	13	東京	社名なし	右書き	手書き	
イネ	M43	9	19		撰集	右書き		
タカキビ	M44	9	27	東京	社名なし	右書き	手書き	
ミヅビエ	M43	8	7	東京	撰集	右書き		
ノビエ	M43	8	17	東京	撰集	右書き		
イタアハ	M43	9	19	武州 玉川	社名なし	右書き	手書き	
メヒヂハ	M43	8	20	東京	撰集	右書き		
スズメノヒエ	M43	8	7	東京	社名なし	右書き	手書き	
チカラシバ	M43	9	18	東京	社名なし	右書き	手書き	
クサヨシ	M43	6	13	東京	撰集	右書き		
ツリエノコロ	M43	8	20		社名なし	右書き	手書き	
クサヨシ	M44	6	10	東京	撰集	右書き		シマガヤに修正
コアハガヘリ	M44	5	22	武州 秩父	社名なし	右書き	手書き	
ヨシ	M44	9	7	東京	撰集	右書き		
ヂシバリ	M44	10	6	甲州 笹子峠	社名なし	右書き	手書き	
セイコノアシ	M42	10	2	相州 鎌倉	社名なし	右書き	手書き	
ハチク	M42	8	9	東京	社名なし	右書き	手書き	
ミゾイチゴツナギ	M43	5	2	東京	社名なし	右書き		
タカネイチゴツナギ	M40	8	12	信州 八ヶ岳	社名なし	右書き	手書き	
スズメノカタピラ	M44	4	23	東京	撰集	右書き		
カハライチゴツナギ	M43	5	13	東京	撰集	右書き		イチゴツナギに修正
ナガハグサ	M43	5	7	東京	社名なし	右書き	手書き	
ササガヤ	M42	10	6	東京	社名なし	右書き	手書き	
ヒヘガヘリ	M43	6	23	東京	撰集	右書き		
ハマヒエガヘリ	M44	7	1	武州 大森	社名なし	右書き	手書き	
アイアシ	M43	7	17	東京	社名なし	右書き	手書き	
ワセヲバナ	M43	8	18	相州 鎌倉	社名なし	右書き	手書き	
ライムギ	M43	5	25		撰集	右書き		
キンエノコロ	M43	8	9	東京	社名なし	右書き	手書き	
エノコログサ	M43	7	5	東京	撰集	右書き		
アブラススキ	M44	9	21	東京	撰集	右書き		
ヲホアブラススキ	M42	9	3	陸中 網張	撰集	右書き		
ヒゲシバ	M42	10	9	東京	社名なし	右書き	手書き	
ネヅミノヲ	M43	9	27	東京	社名なし	右書き	手書き	
ハネガヤ	M42	9	18	武州 白子	社名なし	右書き	手書き	
メガルガヤ	M44	9	26	東京	撰集	右書き		
カニツリススキ	M40	8	12	信州 八ヶ岳	社名なし	右書き	手書き	
カリツリグサ	M44	7	5	東京	撰集	右書き		カニツリグサに修正
コムギ	M43	5	30		撰集	右書き		
シバ	M43	6	10	東京	社名なし	右書き	手書き	

表2 宇和高校旧蔵島津標本のリスト：カヤツリグサ科

Table 2 List of Shimadzu specimens formerly owned by Uwa High School : Specimens of Cyperaceae

種名	採集年 月 日	採集地	ラベル種別	書式	記入	備考
ハタガヤ	M43 9 20	下総 市川	社名なし	右書き	手書き	
イトテンツキ	M42 8 7	常州 海老島	社名なし	右書き	手書き	
クロカハズスゲ	M43 6 2	東京	社名なし	右書き	手書き	
ヒゲスゲ	M43 5 1	駿州 江ノ浦	撰集	右書き		イソスゲに修正
アラスゲ	M44 5 7	東京	社名なし	右書き	手書き	
ヤハラスゲ	M43 5 10	東京	社名なし	右書き	手書き	
ナキリナゲ	M43 9 20	東京	撰集	右書き		誤植 ナキリスゲに修正
ヒメカンスゲ	M41 4 30	相州 箱根	社名なし	右書き	手書き	
ホコスゲ	M43 5 20	武州 高尾山	社名なし	右書き	手書き	
ミクリスゲ	M43 6 1	東京	社名なし	右書き	手書き	
カサスゲ	M45 5 10	東京	撰集	右書き		
コタヌキラン	M42 8 17	陸中 岩手山	社名なし	右書き	手書き	
アゼスゲ	M43 5 1	房州 館山	社名なし	右書き	手書き	
マスクサ	M44 5 4	東京	撰集	右書き		
タニスゲ	M43 5 4	下総 松戸	社名なし	右書き	手書き	
ジユズスゲ	M43 5 5	東京	社名なし	右書き	手書き	
コジユズスゲ	M43 5 2	東京	社名なし	右書き	手書き	
サハスゲ	M43 5 8	東京	社名なし	右書き	手書き	
シラスゲ	M44 5 15	東京	撰集	右書き		
ミヤマナルコスゲ	M41 8 5	野州 日光	社名なし	右書き	手書き	
シラコスゲ	M44 5 1	武州 板橋	社名なし	右書き	手書き	
ヤガミスゲ	M43 5 25	武州 戸田	社名なし	右書き	手書き	
コウバウムギ	M43 5 19	相州 鶴沼	社名なし	右書き	手書き	
ホンモンジスゲ	M43 5 1	東京	社名なし	右書き	手書き	
カンスゲ	M42 4 29		社名なし	右書き	手書き	
ミコシガヤ	M42 6 1	東京	社名なし	右書き	手書き	
ハリスゲ	M41 5 1	東京	社名なし	右書き	手書き	
シホクグ	M43 4 21	武州 大森	撰集	右書き		
タヌキラン	M43 8 9	信州 駒ヶ岳	社名なし	右書き	手書き	
コウバウシバ	M42 7 1	下総 行徳	社名なし	右書き	手書き	
ヤブスゲ	M42 5 10	東京	社名なし	右書き	手書き	
アブラシバ	M43 8 7	野州 日光	社名なし	右書き	手書き	
カハズスゲ	M43 8 5	野州 日光	社名なし	右書き	手書き	
イハスゲ	M43 8 13	陸中 岩手山	社名なし	右書き	手書き	
オニナルコスゲ	M43 6 1	武州 戸田	社名なし	右書き	手書き	
ワアンペラ	M43 8 1	遠州 二川	社名なし	右書き	手書き	
カヤツリグサ	M42 9 7	東京	社名なし	右書き	手書き	
コゴメガヤツリ	M42 9 15	東京	社名なし	右書き	手書き	
ヒナガヤツリ	M44 9 17	東京	社名なし	右書き	手書き	
クグガヤツリ	M43 9 25	相州 鶴沼	社名なし	右書き	手書き	
タマガヤツリ	M42 9 22	東京	撰集	右書き		
ヌマガヤツリ	M43 9 18	下総 中山	社名なし	右書き	手書き	
ミヅハナビ	M43 8 30	東京	社名なし	右書き	手書き	
シチタウ	M43 10 9	東京	撰集	右書き		学名修正
ウシクグ	M43 10 10	東京	社名なし	右書き	手書き	
ハマスゲ	M44 8 30	東京	撰集	右書き		
カンガレキ	M42 9 1	武州 小岩	社名なし	右書き	手書き	
コウシクグ	M43 10 12	東京	社名なし	右書き	手書き	
マツバキ	M43 6 25	東京	社名なし	右書き	手書き	
ハリキ	M42 6 30	東京	社名なし	右書き	手書き	
ヌマハリキ	M42 7 5	武州 志村	社名なし	右書き	手書き	
シカクキ	M43 8 1	東京	撰集	右書き		
アヲテンツキ			社名なし	右書き	手書き	
ヒメテンツキ	M41 8 7	東京	社名なし	右書き	手書き	
ノテンツキ	M43 8 9	濃州 中津川	社名なし	右書き	手書き	
テンツキ	M42 8 13	東京	撰集	右書き		
オホテンツキ	M43 8 16	武州 芝生	撰集	右書き		
ヒデリコ	M42 8 9	東京	撰集	右書き		
ピラウドテンツキ	M42 8 20	房州 根本	社名なし	右書き	手書き	
ヤマキ	M42 8 9	東京	社名なし	右書き	手書き	

小林 真吾

コアゼテンツキ	M43	8	2	東京	社名なし	右書き	手書き	
オホタマガヤツリ	M43	9	23	東京	社名なし	右書き	手書き	
ミヅガヤツリ	M41	9	19	下総 行徳	社名なし	右書き	手書き	
ヒメクダ	M42	7	20	東京	社名なし	右書き	手書き	
ヒンジガヤツリ	M43	8	7	東京	社名なし	右書き	手書き	
クダ	M41	8	1	駿州 久能山	社名なし	右書き	手書き	
アゼガヤツリ	M43	8	5	東京	撰集	右書き		
イガガヤツリ	M42	9	21	下総 船橋	社名なし	右書き	手書き	
ミカツキグサ	M41	8	7	濃州 中津川	社名なし	右書き	手書き	
オホイヌノハナヒゲ	M43	8	20	上総 一ノ宮	社名なし	右書き	手書き	
イヌノハナヒゲ	M42	8	20	陸奥 青森	社名なし	右書き	手書き	
イガクサ	M42	8	9	三州 二川	社名なし	右書き	手書き	
アブラガヤ	M42	9	5	武州 戸田	撰集	右書き		学名修正
ホタルキ	M44	8	2	東京	社名なし	右書き	手書き	
フトキ	M40	8	1	信州 戸隠	社名なし	右書き	手書き	
ウキヤガラ	M42	6	15	下総 行徳	撰集	右書き		
マツカサススキ	M43	9	17	下総 八幡	撰集	右書き		
サンカクキ	M42	9	21	武州 小岩	社名なし	右書き	手書き	
コシンジユガヤ	M43	8	20	岩代 会津	撰集	右書き		
シチタウ	M44	10	9		撰集	右書き		

表3 宇和高校旧蔵島津標本のリスト：隠花植物

Table 3 List of Shimadzu specimens formerly owned by Uwa High School : Specimens of Cryptophytes

種名	採集年 月 日	採集地	ラベル種別	書式	記入	備考
アヲミドロ	M38 5 8	東京	撰集	右書き		
アヲサ	M37 3 18	相州 江ノ島	撰集	右書き		
アヲノリ	M37 3 21		撰集	右書き		
ホソジュズモ	M38 2 9	相州 江ノ島	標本部	右書き	手書き	藻体なし
ナガミル	M38 4 7	相州 松輪	撰集	右書き		
ウミウチハ	M37 4 8	相州 三崎	撰集	右書き		
イハヒゲ	M36 5 1	房州 館山	標本部	右書き	手書き	
フクロノリ	M38 3 10	相州 七里ヶ浜	標本部	右書き	手書き	
ハバノリ	M37 3 8	相州 鎌倉	撰集	右書き		
モヅク	M37 6 8	房州 館山	撰集	右書き		
カヂメ	M37 10 30	常州 大洗	撰集	右書き		
アラメ	M38 3 25	房州 沖ノ島	撰集	右書き		
イシゲ	M37 4 17	豆州 下田	標本部	右書き	手書き	
トラノヲ	M36 3 7	相州 江ノ島	標本部	右書き	手書き	
ヒジキ	M38 1 27	相州 江ノ島	撰集	右書き		
アカモク	M38 4 7	房州 館山	標本部	右書き	手書き	
アマノリ	M38 3 8	武州 大森	撰集	右書き		
カハモヅク	M37 2 8	東京	標本部	右書き	手書き	
ガラガラモドキ	M38 5 2	駿州 興津	標本部	右書き	手書き	
テングサ	M38 4 7	相州 松輪	撰集	右書き		
ユヒギリ	M36 3 8	房州 沖ノ島	標本部	右書き	手書き	
コトジツノマタ	M38 3 25	房州 沖ノ島	撰集	右書き		
スギノリ	M37 5 2	豆州 下田	標本部	右書き	手書き	
ホンダワラ	T9 2 18	相模 江島	株・標本部撰	左書式		
オゴノリ	M36 4 10	武州 羽根田	撰集	右書き		
フシツナギ	M37 5 5	相州 江ノ島	撰集	右書き		
キブリソゾ	M37 5 2	相州 江ノ島	標本部	右書き	手書き	
和名なし	M36 4 20	豆州 下田	標本部	右書き	手書き	ユナ
フノリ	M38 4 9	志州 石鏡	撰集	右書き		
ホソツノマタ	M37 5 1	豆州 下田	標本部	右書き	手書き	
キントキ	M38 5 13	志州 石鏡	標本部	右書き	手書き	
シヒタケ	M37 5 28	豆州 天城山	撰集	右書き		子実体なし, cult.
キクラゲ	M38 7 4	東京	撰集	右書き	手書き	
アスナロノヒジキ	M37 8 10	濃州 恵那山	標本部	右書き	手書き	
アカゴケ	M37 8 18	陸中 栗駒山	標本部	右書き	手書き	子実体なし
コバノエイランタイ	M38 8 5	野州 白根山	標本部	右書き	手書き	
カハラゴケ	M37 10 8	東京	撰集	右書き		
アミガサゼニゴケ	M37 6 1	東京	撰集	右書き		
ニハスギゴケ	M36 10 8	東京	撰集	右書き		
セイタカスギゴケ	M37 9 2	陸中 岩手山	撰集	右書き		
カウヤノマンネングサ	M37 6 1	紀州 高野山	撰集	右書き		
ミヅゴケ	M38 8 1	濃州 恵那山	撰集	右書き		
和名なし	M37 7 21	野州 日光	撰集	右書き		
タマゴケ	M37 5 1	相州 箱根	標本部	右書き	手書き	
コカラクサゴケ	M37 3 9	東京	標本部	右書き	手書き	
ウチハゴケ	M36 10 15	紀州 紀三井寺	標本部	右書き	手書き	誤植?
ミヅワラビ	M38 9 20	東京	標本部	右書き	手書き	
イヌシダ	M36 8 20	東京	標本部	右書き	手書き	
ワウレンシダ	M37 9 18	東京	撰集	右書き		
ハコネサウ	M36 8 30	相州 箱根	標本部	右書き	手書き	
キノモトサウ	M38 10 5	東京	撰集	右書き		
オホバキノモトサウ	M37 8 25	相州 葉山	標本部	右書き	手書き	
ナチシダ	M35 8 21	紀州 那智山	標本部	右書き	手書き	
コモチシダ	M37 5 18	相州 逗子	標本部	右書き	手書き	
ミヤマシケシダ	M35 9 10	武州 御岳	標本部	右書き	手書き	
ヘラシダ	M36 9 10	豆州 下田	標本部	右書き	手書き	
ノコギリシダ	M37 9 7	房州 鋸山	標本部	右書き	手書き	
シケシダ	M37 8 30	東京	撰集	右書き	手書き	
トラノオシダ	M37 9 20	東京	撰集	右書き		
カナワラビ	M36 9 17	相州 鎌倉	標本部	右書き	手書き	

キノデ	M37	9	28	東京	撰集	右書き		
イタチシダ	M37	10	10	東京	撰集	右書き		
ヤブソテツ	M37	10	3	東京	撰集	右書き		
ミゾシダ	M38	9	5	東京	撰集	右書き		
ハリガネワラビ	M38	9	25	東京	標本部	右書き	手書き	
ベニシダ	M38	9	23	東京	撰集	右書き		
ホシダ	M37	9	19	東京	標本部	右書き	手書き	
クマワラビ	M38	10	2	東京	撰集	右書き		
ヒメワラビ	M38	9	25	東京	標本部	右書き	手書き	
ミツデアラボシ	M37	8	28	駿州 久野山	撰集	右書き		誤植 久能山
ノキシノブ	M38	10	7	東京	撰集	右書き		
ビロウドシダ	M36	8	9	野州 日光	標本部	右書き	手書き	
マメツタ	M37	8	27	駿州 久能山	標本部	右書き	手書き	
コバノヒノキシダ	M38	9	5	和州 五条	標本部	右書き	手書き	
コイヌワラビ	M38	8	18	東京	標本部	右書き	手書き	
イヌソラビ	M37	9	28	東京	撰集	右書き		誤植 イヌワラビ
ウラジロ	M38	9	21	豆州 下田	撰集	右書き		
ツルシノブ	M37	10	25	東京	撰集	右書き		
ゼンマイ	M37	5	3	東京	撰集	右書き		
コハナヤスリ	M37	5	10	東京	撰集	右書き		
フユノハナワラビ	M38	11	8	豆州 天城山	撰集	右書き		
サンセウモ	M38	10	20	東京	撰集	左右混在		
イヌドクサ	M37	8	15	濃州 中津川	標本部	右書き	手書き	
スギナ	M38	4	20	東京	撰集	右書き		
ヒカゲノカヅラ	M38	8	27	紀州 高野山	撰集	右書き		
マンネンスギ	M38	8	5	野州 那須山	撰集	右書き		
ホソバタウゲシバ	M37	9	1	加州 白山	撰集	右書き		
クラマゴケ	M38	7	5	東京	撰集	右書き		

表4 宇和高校旧蔵島津標本のリスト：薬用植物・有用植物

Table 4 List of Shimadzu specimens formerly owned by Uwa High School : Specimens of Medicinal plant and Useful plant

区分	種名	採集年	月	日	採集地	ラベル種別	書式	記入	備考	
薬用	ツルシノブ	M35	10	2	東京	撰集	右書き			
	アキサフラン	M37	7	21		撰集	右書き			
	フタバアフヒ	M36	5	8	武州 武甲山	撰集	右書き			
	オキナグサ	M37	5	1	武州 高尾山	撰集	右書き			
	ケシ	M36	6	2		撰集	右書き			
	クサノワウ	M38	5	13	東京	撰集	右書き		学名修正	
	ワレモカウ	M37	8	22	東京	撰集	右書き			
	ダイコンサウ	M36	8	9	東京	撰集	右書き			
	フウロサウ	M36	10	5		撰集	右書き			
	アマ	M38	7	5		撰集	右書き			
	ヘンルウダ	M37	7	13		撰集	右書き			
	ザクロ	M38	6	15		撰集	右書き			
	ミシマサイコ	M38	9	12		撰集	右書き			
	ウキキヤウ	M36	8	4		撰集	右書き			
	センキウ	M37	9	18		標本部	右書き	手書き		
	イノンド	M37	7	8		撰集	右書き			
	コエンドロ	M32	7	2		撰集	右書き			
	タウヤクリンタウ	M38	8	10	信州 八ヶ岳	標本部	右書き	手書き		
	センブリ	M37	9	10	武州 高尾山	撰集	右書き			
	ハクカ	M36	9	17		撰集	右書き			
	テフセンアサガホ	M37	8	2		撰集	右書き			
	ベニバナ	T10	7	21	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	栽	
	チギタリス	M36	6	21		撰集	右書き			
	セメンシナ	M38	7	18		撰集	右書き			
	キキヤウ	M34	8	21	山城	標本部	左書き	手書き		
	アキ	M43	9	21		撰集	右書き			
	エンジュ	M44	8	15	東京	社名なし	右書き	手書き		
	有用	ヤバネムギ	M30				標本部撰	右書き	手書き	
		コムギ	M30				標本部撰	右書き	手書き	
		モチゴメ	M30				標本部撰	右書き	手書き	
		オホムギ	M30				標本部撰	右書き	手書き	
		キビ	M30				標本部撰	右書き	手書き	
シコクビエ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ハトムギ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ソバ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ダイズ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
アヅキ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
エンドウ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
アヲエンドウ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
アカエンドウ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ソラマメ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ササゲ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
フヂマメ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
タウジュマメ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ミツバ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
セリ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ツルナ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ハウレンサウ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ヨメナ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ネギ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
シュンギク		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ウド		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ミヅナ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
カラシナ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ダイコン		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ニンジン		M30				標本部撰	右書き	手書き		
スギナ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ゴバウ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
オニユリ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
ナスビ		M30				標本部撰	右書き	手書き		
キウリ	M30				標本部撰	右書き	手書き			
シヒタケ	M30				標本部撰	右書き	手書き			
キクラゲ	M30				標本部撰	右書き	手書き			
ワカメ	M30				標本部撰	右書き	手書き			
アラメ	M30				標本部撰	右書き	手書き			
アサクサノリ	M30				標本部撰	右書き	手書き			

オゴノリ	M30	標本部撰	右書き	手書き
テングサ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ワサビ	M30	標本部撰	右書き	手書き
テンジクタウガラシ	M30	標本部撰	右書き	手書き
シソ	M30	標本部撰	右書き	手書き
サンセウ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ウメ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ナシ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ミカン	M30	標本部撰	右書き	手書き
カキ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ビハ	M30	標本部撰	右書き	手書き
アキグミ	M30	標本部撰	右書き	手書き
クリ	M30	標本部撰	右書き	手書き
クズ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ジヤガタライモ	M30	標本部撰	右書き	手書き
チヤ	M30	標本部撰	右書き	手書き
タバコ	M30	標本部撰	右書き	手書き
カラハナサウ	M30	標本部撰	右書き	手書き
アキ	M30	標本部撰	右書き	手書き
カハラカツメイ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ワタ	M30	標本部撰	右書き	手書き
アサ	M30	標本部撰	右書き	手書き
アマ	M30	標本部撰	右書き	手書き
マヲ	M30	標本部撰	右書き	手書き
シナノキ	M30	標本部撰	右書き	手書き
イチビ	M30	標本部撰	右書き	手書き
カヂノキ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ミツマタ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ノビエ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ベニバナ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ハンノキ	M30	標本部撰	右書き	手書き
アカネ	M30	標本部撰	右書き	手書き
コブナグサ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ナタネナ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ゴマ	M30	標本部撰	右書き	手書き
セメンシナ	M30	標本部撰	右書き	手書き
サザンクワ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ハゼノキ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ツバキ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ヂギタリス	M30	標本部撰	右書き	手書き
ハクカ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ケシ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ウイキヤウ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ニガヨモギ	M30	標本部撰	右書き	手書き
シロバナムシヨケギク	M30	標本部撰	右書き	手書き
シキミ	M30	標本部撰	右書き	手書き
アセビ	M30	標本部撰	右書き	手書き
スギ	M30	標本部撰	右書き	手書き
アサマツゲ	M30	標本部撰	右書き	手書き
サハラ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ハハキギ	M30	標本部撰	右書き	手書き
シナガハハギ	M30	標本部撰	右書き	手書き
コメツブウマゴヤシ	M30	標本部撰	右書き	手書き
ノゲシ	M30	標本部撰	右書き	手書き
スズメノチャヒキ	M30	標本部撰	右書き	手書き
スズメガヤ	M30	標本部撰	右書き	手書き

表5 宇和高校旧蔵鳥津標本のリスト：混在標本

Table 5 List of Shimadzu specimens formerly owned by Uwa High School : Specimens of Mixed

種名	採集年月日	採集地	ラベル種別	書式	記入	備考
ヒエ	M30		標本部撰	右書き	手書き	
ドクウツギ	M30		標本部撰	右書き	手書き	
イネ	M30		標本部撰	右書き	手書き	
ミル	M37 4 2	志州 鳥羽	撰集	右書き		
コナウミウチワ	M42 8 15	志摩 濱島	株・標本部撰	左書き		明治時代の標本だが株式会社ラベル
ウシノシツベイ	M43 8 7	東京	社名なし	右書き	手書き	
ガマ	M44 8 2	東京	撰集	右書き		
ヨシクサ	M44 10 10	相州 大山	社名なし	右書き	手書き	
イハタケ	M37 9 5	信州 御岳	撰集	右書き		
タウコギ	M37 9 30	東京	撰集	右書き		
キ	T7 7 1	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
イハヒゲ	T9 3 7	相模 江島	株・標本部撰	左書き		
フクロノリ	T9 3 7	相模 江島	株・標本部撰	左書き		
スヒカヅラ	T9 5 14	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
サハラグルマ	T9 5 14	山城 比叡山	株・標本部撰	左書き	手書き	
ニハヤナギ	T9 8 3	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
アカネ	T9 8 1	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
オホケタデ	T9 8 1	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
イラクサ	T9 9 3	京都 貴船山	株・標本部撰	左書き	手書き	
ヤブタバコ	T9 7 1	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
ヒメガマ	T10 8 1	山城 八瀬	株・標本部撰	左書き	手書き	
オドリコサウ	T10 6 17	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
クマツヅラ	T10 9 14	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
ヒゲスゲ	T10 6 5	山城 京都市外	株・標本部撰	左書き	手書き	
テンヂクボタン	T10 8 7	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	栽
イ子	T6 9 4	山城 京都	株・標本部撰	左書き		
ミヅガシハ	T7 5 2	山城 深泥池	株・標本部撰	左書き	手書き	
チガヤ	T10 5 16	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
ウハミヅザクラ	T10 5 4	山城 花園	株・標本部撰	左書き	手書き	
ヨモギ	M36 10 1	東京	撰集	右書き		
ケヤキ	T9 4 4	山城 京都	株・標本部撰	左書き		
アカメガシハ	T9 8 1	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
カラスビシヤク	M35 6 20	東京	撰集	右書き		
アマ	T10 7 3	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	栽
ワタ	T10 8 17	山城 嵯峨	株・標本部撰	左書き	手書き	栽
トロロアフヒ	T9 9 22		株・撰集	左書き	手書き	京都・東京・福岡ラベル
コガンピ	T10 8 1	三河 稲熊	株・標本部撰	左書き	手書き	
シシウド	T9 8 1	山城 比叡山	株・標本部撰	左書き	手書き	
ウマノミツバ	T7 8 12	山城 八瀬	株・標本部撰	左書き	手書き	
ノダケ	T9 10 3	山城 比叡山	株・標本部撰	左書き	手書き	
サンシチサウ	T9 9 23	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
ヨモギ	T9 9 21	山城 京都	株・標本部撰	左書き		
シヤクヤク	T9 5 1	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
ムクゲ	T10 9 27	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	栽
ソヨゴ	T9 6 4	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
ツルカウゾ	T9 6 10	豊後 祖母ヶ岳	株・撰集	左書き	手書き	京都・東京・福岡ラベル
カウゾ	T9 5 23	相州 大山	株・撰集	左書き	手書き	京都・東京・福岡ラベル
イチヂク	T9 6 13	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
カヂノキ	T14 4 18	山城 北白川	株・標本部撰	左書き	手書き	
カヂノキ	T8 6 2	武州 百草	株・撰集	左書き	手書き	京都・東京・福岡ラベル
ワウレン	T9 5 4	山城 比叡山	株・標本部撰	左書き	手書き	
ミツバアケビ	T9 5 13	江州 坂本	株・標本部撰	左書き	手書き	
アケビ	T7 5 5	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
カラスムギ	M44 5 20	東京	撰集	右書き		
ノイバラ	T7 5 14	山城 京都	株・標本部撰	左書き		
モモ	T10 3 30	山城 京都	株・標本部撰	左書き		
クソニンジン	T9 8 1	山城 京都	株・標本部撰	左書き		
ヒメハギ	T9 5 30	山城 京都	株・標本部撰	左書き		
ワラビ	T10 10 19	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
ヲシダ	T7 8 1	山城 京都	株・標本部撰	左書き	手書き	

キガンピ	T3	9	8	豊前	犬ヶ岳	株・標本部撰	左書き	手書き	会社化以前だが株式会社ラベル
ガンピ	T7	7	18	勢州	朝熊山	株・撰集	右書き		元号修正 明治→大正
カハラヨモギ	T9	8	3	山城	京都	株・標本部撰	左書き		
ツルドクダミ	T10	8	3	山城	御室	株・標本部撰	左書き		
ア井	T9	7	19	山城	御室	株・標本部撰	左書き		
ドクダミ	M34	7	3	東京		撰集	右書き		
ドクダミ	T10	7	14	山城	京都	株・標本部撰	左書き		
アヲツヅラフジ	T10	8	1	山城	比叡山	株・標本部撰	左書き	手書き	
アヲギリ	T10	7	12	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	裁
ヤマア井	T9	6	14	山城	稻荷山	株・標本部撰	左書き		
ウリハダカヘデ	T10	7	1	江州	比良山	株・標本部撰	左書き	手書き	
クチナシ	T9	6	13	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
カハラニンジン	T9	8	13	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
クズ	T10	8	1	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
クズ	T10	8	13	山城	白川	株・標本部撰	左書き	手書き	
ナツメ	T10	6	14	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
クマヤナギ	T10	8	1	和州	春日山	株・標本部撰	左書き		
コガンピ	T 8	9	7	上総	鹿野山	株・撰集	右書き		元号修正 明治→大正
ミツマタ	T7	2	21			株・撰集	右書き		元号修正 明治→大正
ゴカエフワウレン	T9	5	4	山城	比叡山	株・標本部撰	左書き	手書き	
カハラマツバ	T10	8	10	信州	浅間山	株・標本部撰	左書き	手書き	
ニハトコ	T10	4	13	山城	京都	株・標本部撰	左書き		
ミツマタ	T10	3	20	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	裁
セツブリ	T7	9	30	山城	岩倉	株・標本部撰	左書き	手書き	
アサ	T10	8	21	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	裁
フヂ	T6	5	1	山城	八瀬	株・標本部撰	左書き		
アカバナムシヨケギク	T9	5	14	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
イタドリ	T10	9	14	山城	京都清水山	株・標本部撰	左書き		
ノグルミ	T10	5	20	豊後	赤松峠	株・標本部撰	左書き	手書き	
クハ	T14	4	14	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
ガマ	T10	7	12	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
テウセンアサガホ	M30					撰集	右書き	手書き	
メギ	T9	5	11	山城	京都	株・標本部撰	左書き		
イカリサウ	T9	5	12	山城	比叡山	株・標本部撰	左書き		
セキシヤウ	T7	6	1	山城	京都比叡山	株・標本部撰	左書き		
ハコベ	T9	6	13	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
ヒカゲノカヅラ	M37	8	2	紀州	高野山	撰集	右書き		
オホババウシバナ	T10	8	3	江州	大津	株・標本部撰	左書き		
ケシ	T9	5	13	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
ノリウツギ	T8	7	13	武州	三峰山	株・撰集	右書き		元号修正 明治→大正
ユキノシタ	T9	6	14	山城	比叡山	株・標本部撰	左書き		
ウツボグサ	T7	5	14	相州	箱根山	株・標本部撰	左書き		
ハクカ	T10	9	30	山城	京都	株・標本部撰	左書き	手書き	
シソ	T10	9	20	山城	大文字山	株・標本部撰	左書き	手書き	



図1 標本が収納されていた木製の箱
Fig.1 Wooden boxes in which specimens were stored

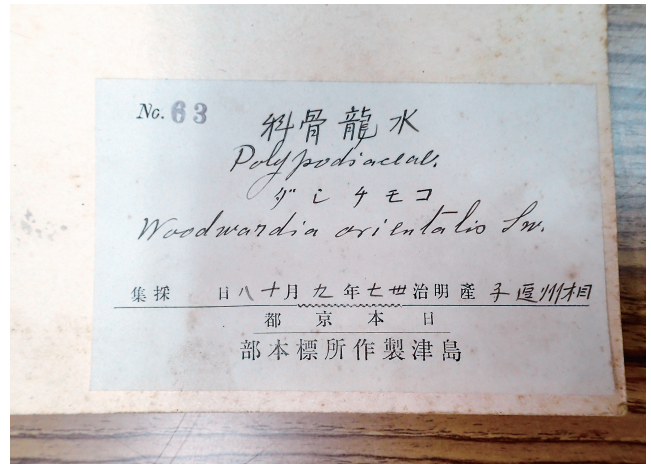


図4 右書きのラベル
Fig.4 Labels written from right



図2 標本の例；オキナグサ
Fig.2 An example of a specimen ; *Pulsatilla cernua*



図5 営業拠点の記載例
Fig.5 Example of sales office written on the label



図3 社名のないラベル
Fig.3 Labels without company name

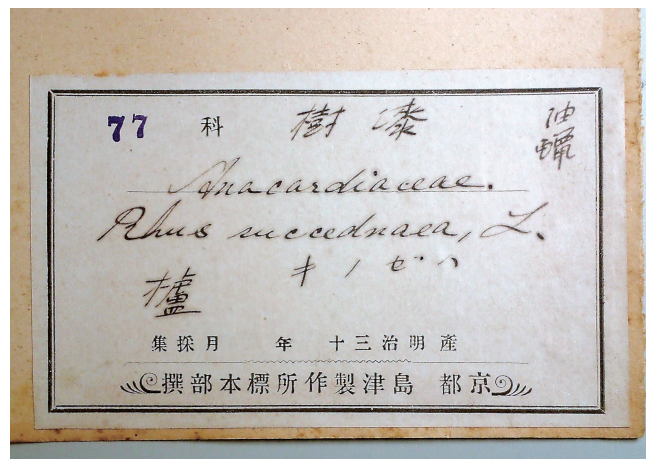


図6 装飾要素のあるラベル
Fig.6 Labels with decorative elements



図7 明治39年に刊行された販売目録
Fig.7 Sales catalog published in 1904

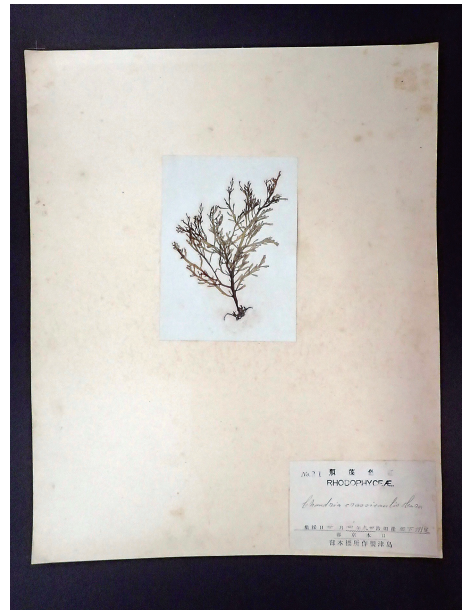


図10 ユナの標本
Fig.10 Specimen of *Chondria crassicaulis*

—133—

壹組トセル植物標本 (乾腊)

1	松葉植物標本	千五百種入	180.00
2	全	手 種全	120.00
3	全	五百種全	60.00
以上模範植物標本、各料毎一冊包ヲ以テ整理セリ			
4	普通植物標本	三百種入	36.00
5	全	二百種全	24.00
6	有用植物標本	二百種全	24.00
7	全	百五十種全	18.00
8	全	百 種全	12.00
9	森林植物標本	百五十種全	18.00
10	全	百 種全	12.00
11	食用植物標本	百 種全	12.00
12	有毒植物標本	四十種全	4.80
13	全	五十種全	6.00
14	薬用植物標本	三十種全	3.60
15	全	三十種全	3.60
16	染料植物標本	二十五種全	3.75
17	纖維植物標本	三十種全	4.50
18	油糧植物標本	二十二種全	3.30
19	製紙植物標本	十 種全	1.50
20	高山植物標本	百 種全	15.00
21	牧草植物標本	百 種全	12.00
22	寄生植物標本	十五種全	2.25
23	全	十 種全	1.50
24	食虫植物標本	十 種全	1.50
25	全	五 種全	.75
26	牧草植物標本	百二十種全	14.00
27	禾本科植物標本	百二十種全	14.00

京都島津製所標本製

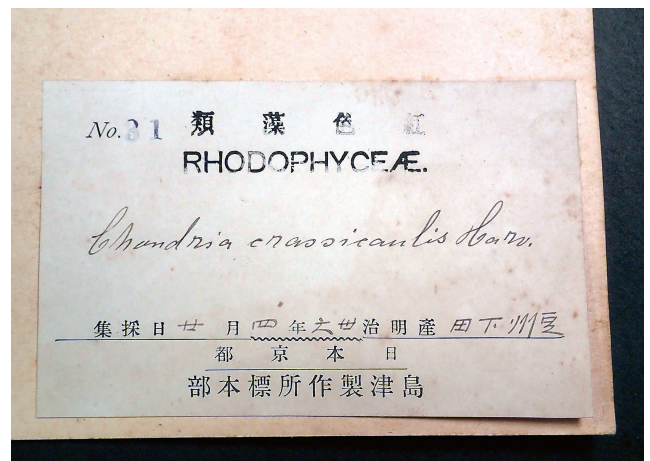


図11 ユナのラベル
Fig.11 Label of *Chondria crassicaulis*

—134—

28	蓼科植物標本	六十種全	7.80
29	百合科植物標本	五十種全	7.50
30	蘭科植物標本	三十種全	4.50
31	毛茛科植物標本	四十種全	6.00
32	薔薇科植物標本	四十種全	10.20
33	豆科植物標本	六十種全	10.00
34	椴木科植物標本	十 種全	1.50
35	荳蔻科植物標本	十 種全	1.50
36	繖形科植物標本	三十種全	4.50
37	唇形科植物標本	五十種全	7.50
38	西草科植物標本	二十種全	3.00
39	忍冬科植物標本	二十種全	3.00
40	菊科植物標本	百 種全	15.00
41	半蒴科植物標本	百 種全	15.00
42	海藻標本	五十種全	7.50
43	全	三十種全	4.50
44	野花植物標本	二百種全	30.00
45	全	百 種全	15.00

植物標本模型

47	植物標本模型	(第二二期)六種全	7.50	
内附	單子葉植物標本ノ類	(四種全)	2.00	
	全	稍成長ノ類	(全)全	1.50
	雙子葉植物標本ノ類	(四種全)	1.50	
	全	稍成長ノ類	(全)全	1.50
	多子葉植物標本ノ類	(四種全)	1.00	
	全	稍成長ノ類	(全)全	1.00

京都島津製所標本製

図8, 9 組み標本のリスト
Fig.8, 9 Sales list of set specimens



図12 ヒナザサの標本
Fig.12 Specimen of *Coelachne japonica*

